

国立新美術館は 2026 年 1 月、本年 10 月に開幕する「少女漫画・インフィニティ 萩尾望都×山岸凉子×大和和紀 三人展」に先駆け、同館キュレーターで世界でも数少ないマンガ研究者のひとり、吉村麗によるトークイベントをロンドンとパリで開催しました。

吉村は、国立新美術館が主催した「MANGA⇔TOKYO」(ラ・ヴィレット、2018 年)と企画に深く関わった「Manga」(大英博物館、2019 年)が開催されたふたつの都市で、現地の専門家らと意見を交わしながら、美術館におけるマンガの拡がりや少女マンガの世界について語りました。

マンガは長らく、年齢や性別によって細分化された出版システムと結びつけて語られてきたが、そのなかで少女マンガは、日本の文化史において特異な位置を占めている。海外ではしばしば、思春期の女性読者に向けた感傷的な物語の一ジャンルに還元されがちであるが、実際のところ少女マンガは、美的、物語的、社会的な次元において、きわめて豊かな実験の場を形成してきた。こうした複雑性そのものを問い直すべく、国立新美術館の主任研究員である吉村麗と、出版社アカタ (Akata) の編集ディレクターであるブルーノ・ファム (Bruno Pham) が、パリ日本文化会館 (Maison de la culture du Japon à Paris) にて、少女マンガの歴史とその課題を主題とする講演を開催した。満員の会場では、国立新美術館国際連携室長の高美玲と、パリ日本文化会館館長の鈴木仁が、両者を紹介した。

マンガ研究の専門家として知られる吉村は、学術研究と博物館学的背景を有している。2014 年から 2017 年にかけて川崎市市民ミュージアム (Kawasaki City Museum) の漫画部門で学芸員を務めた後、2017 年に国立新美術館の客

員研究員に着任し、2021 年から特定研究員、2025 年から主任研究員に就いている。〈少女マンガの世界〉と題された講演において、吉村は少女マンガの歴史的展開を概観するとともに、黄金期を代表する三人の作家を軸に準備中の展覧会の思想的基盤を提示した。この展覧会は、2026 年 10 月 28 日から 2027 年 2 月 8 日まで、国立新美術館にて開催される予定だ。

吉村は講演の冒頭で、戦後日本のマンガ市場がきわめて精緻な編集上のセグメンテーションに基づいて構築されてきたことを指摘し、そのなかで女性読者が中心的な位置を占めてきた点を強調した。作者、読者の双方において、長らく男性中心であった他国のコミック文化とは異なり、日本では比較的早い段階から、女性に対して高い編集上の可視性が与えられてきた。ファムもまた、「コミックの歴史の大部分で、女性は作者としても読者としても顧みられてきませんでした。私の考えでは、世界のコミック出版のなかで、編集面、読者層の双方において、女性にもっとも大きな場を与えてきたのは、疑いなく日本です」と述べている。

単行本に先行する掲載を担った雑誌と、それによって可能となったページ単位の原稿料制度は、多くの女性作家に職業としての継続的な創作活動を可能にし、長期的なキャリア形成を支えてきた。こうした経済的枠組みこそが、少女マンガの成立と定着において決定的な役割を果たした。

吉村は続いて、「少女」という語の成り立ちそのものに立ち返る。この語は、明治維新後の近代教育制度の導入とともに次第に制度化された、男女の

厳格な区分に由来する。この分化は出版界にも速やかに反映され、少年誌と並行して、若い女性を主な読者層とする雑誌が誕生した。第二次世界大戦以前から少女向け出版物はすでに多数存在していたが、その物語の多くは男性作家の手によるものだった。1950年代から1960年代にかけて、ようやく女性作家たちがこの分野で持続的な存在感を確立する。

1970年代は少女マンガ黄金期と称され、戦後間もなく生まれた世代によって牽引された。この時代には、物語と表現の双方において大きな転換が生じている。作品は、次第に従来の定型的な語りから離れ、アイデンティティ、死、セクシュアリティ、孤独、権力関係、自立への希求といった、より複雑な主題を扱うようになった。また、画面構成や表現手法も刷新され、時間の演出、イメージの重層化、身体表現の強化に重点が置かれるようになる。こうして少女マンガは、マンガという表現媒体に持続的な影響を及ぼす形式的実験の場としての性格を帯びるに至った。

吉村とファムの意見交換は、これらの作品のフランスにおける受容の状況、現代の出版を取り巻く課題を浮き彫りにした。ファムによると少女マンガは、批評的には高く評価されている一方で、出版経済上の制約に依然として強く規定されているという。フランスにおける出版を前提とした作品の選定は、多くの場合、巻数、読者にとってのアクセスのしやすさ、流通の見込といった要素に基づいており、その結果、選択が時として限定的なものとならざるを得ない。これに、日本における原画（原稿）の保存・アーカイブをめ

ぐる物理的な困難も相俟って、こうした事情は編集作業のみならず、エキシビションの開催においても大きな制約となっている。

吉村は次に、数十年にわたる少女マンガの多様性と連続性を体現する存在として、萩尾望都、山岸涼子、大和和紀を取り上げた。「この三人を選んだのは、マンガ史において彼女たちが果たしてきた重要な役割を示すと同時に、マンガ家としてのキャリアとはいかなるものかを深く考察するためです」と吉村は説明する。彼女たちの作品に共通するのは、長期にわたる創作活動のなかで表現を更新し続けてきたことであり、そこには空間、身体、感情についての独自の感覚と、日本的、西洋的文脈の双方と向き合う持続的な対話が刻まれている。「ベビーブーム世代はマンガ産業を大きく支えてきましたが、三人の作家はいまや80歳近くになります。彼女たちの声を直接聞ける機会は今後ますます減っていくはずです。だからこそ、その証言を記録することは極めて重要なのです」と吉村は付け加えた。

中心的な三作家のなかで、萩尾望都は、少女マンガというジャンルの礎をなす存在だ。その代表作である《ポーの一族》は、物語的な野心と、形式の選択の双方において、一つの転換点となる作品である。同一の世界観を共有する短編の連作として構想されたこの物語は、その構成によって当時の編集上の制約を回避し、反復や記憶、メランコリーを軸とする、断片的な時間のあり方を描き出した。空間と時間の構成にはとりわけ革新性が認められ、イメージの重なり、視点の変化、リズムの断ち切り、点描の表情豊かな用法が組

み合わさることで、独自の雰囲気を生んでいる。同作は、連載開始から数十年を経た現在に至るまで継続され、深化されてきた作品であり、自ら選択した表現形式を厳密に維持しつつ、創作を長期的な連続性のうちに位置づける萩尾望都の能力を明確に示している。

山岸凉子の歩みは、芸術的および歴史的主題に深く根差し、それらをドラマ的構造のもとで扱ってきた点において際立っている。《アラベスク》は、1960年代の少女マンガに多く見られたバレエ作品の系譜に連なるが、バレエを単なる美的モチーフとしてではなく、身体と人生を賭ける過酷な天職として描いている。厳密なリアリズムに貫かれた作画は、解剖学、身体の姿勢、運動に関する徹底した探究を明確に示しており、その表現の基盤には、作者自身のクラシック・バレエの経験がある。さらに、聖徳太子を題材とした作品に代表されるように、山岸は、歴史マンガにおいても高い解釈の自由度を示し、内省的、精神的、情動的な次元を取り込むことで、孤独、天才、欲望といった主題を掘り下げ、後のマンガ、とりわけボーイズラブの発展に影響を与える表現の地平を切り拓いた。

最後に吉村は、大和和紀の作品世界に言及した。娯楽性、歴史的精確さ、自立を志向する女性像の表現を併せ持つ点が、その大きな特徴である。《はいからさんが通る》では大正時代を舞台に、労働、恋愛、社会的役割の再定義を通じて自立へと歩む若い女性の姿が描かれた。衣装、服装様式の変化、そして服飾の細部に払われた周到な配慮は、物語の構成そのものに深く関与す

ると同時に、20 世紀初頭における日本社会の変容を繊細に伝えている。大和は、見開きページの視覚的構成と場面における感情表現の明瞭さにとりわけ注意を払いながら、物語への読者の関与を強めるユーモアの表現を作品のうちに組み込んでいる。《源氏物語》のマンガ化は、彼女のキャリアにおけるもう一つの重要な到達点だ。日本文学における古典的作品を、マンガという表現媒体へと転換する試みは、本来であれば原典に固有の省略と暗示の美学が失われかねないものであるが、彼女はそれを損なうことなく保持することに成功しており、学生から一般読者に至るまで幅広い層にとって、マンガが文化的継承と学習の媒介として有効に機能し得ることを示している。

歴史的分析にとどまらず、吉村とファムの対話は、少女マンガの将来にも視線を向けた。ファムが指摘するように、現代の作品が 1970 年代の作品に比して軽やかに見える場合があるとしても、それはより安定した社会状況の反映として理解されるべきである。社会の鏡としての少女マンガは、現在もお、哲学的、実存的主題を含む多様な語りを受け容れる、きわめて幅広い読者層に向けて発信され続けている。

講演を通じて改めて示されたのは、少女マンガが決して固定化されたジャンルではない、という事実だ。それは、日本社会の社会的、経済的、文化的変容と深く結びついた、動的な芸術の領域である。研究、展示、出版という異なる視点が交差することで、長らく周縁に押しやられてきたこれらの作品

が、今日ではマンガ史のみならず、文化の継承をめぐる同時代的思考において不可欠な位置を占めていることが明らかである。

講演は、少女マンガに精通した参加者たちから高い評価を得た。その一人であるセドリックは、「とても刺激的なカンファレンスでしたし、マンガを知的に扱うこうしたテーマのイベントは本当に稀です。大いに意義がありました」と語った。この見解は、来場者のロゼンヌの発言によっても裏づけられた。「マンガの話になると、多くの方は少年マンガのところで話を止めてしまいます。少女マンガはしばしば忘れられるか、あるいは二次的なジャンルとして捉えられがちです。そうしたなかで、このジャンルに決定的な足跡を残しながらも、フランスの一般読者には必ずしも知られていない女性作家たちに改めて光を当てるのは、とても意義深いことだと思います」

（レポート：クレマン・ルルー、ジャーナリスト）